

三家老を偲んで

—幕末における長州藩の動き—

會員 内山英雄

元号が、一世一元の制度に改められたのは明治元年（二六八）である。それ以前は、国に重大異変があった時、元号が改められたという。本稿での研究対象は、文久三年（二六三）と元治元年（二六四）の二ヶ年間に我が長州が、異変の渦中に如何に対処して活路を見出したか、その過程を追求してみたのである。

先ず、文久三年五月一〇日より六月五日迄に五回にわたり、長州藩は外国船を砲撃し攘夷を実行している。それは、下関海峡を通過する米国商船、仏・蘭の軍艦等を砲撃交戦したことである。最初は、奇襲作戦が奏効しているが、終わり頃には長州藩の軍艦が撃沈され、下関に上陸を許している。

毛利定広（元徳）は、砲台を巡視激励し、天皇からも褒められたので藩の士気はあがっていたが、藩内情勢は複雑であった。

文久三年八月一八日の政変は、長州にとっても最も痛手であった。これまで皇居護衛をしていた長州藩の任を、幕府によって罷免させられたことである。長州では、京都にあまり兵力を持たなかったことで、下野させられたのであろう。その時長州寄りの七卿も長州に下ることになった。七卿の一人沢卿の描いた七卿の都落ちの蓑笠姿は、一抹の哀感を覚える。

元治元年六月五日の夜、池田屋事件が起こった。これは京都三条河原町の旅籠池田屋において討幕の密議

をしていた諸藩の志士達に、幕府側の新撰組隊長近藤勇等が不意に切り込み、松陰門下の逸材吉田稔磨等一人を惨殺している。

六月一四日には、池田屋の変報が長州に届いた。遊撃隊の創始者木島又兵衛は、一五日常都へ向かって出発した。同日、三家老にも出動命令が下り、一六日には家老福原越後が出発する。続いて、一七日には益田

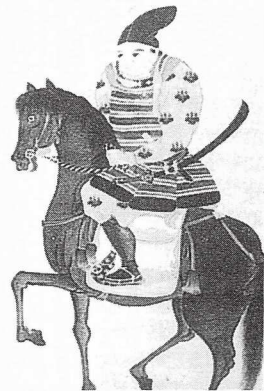


福原越後木像

親施・国司信濃の両家老が上関に集合して出発している。池田屋事件を切っ掛けに、長州は皇居護衛奪回の

意図があったようである

京都出陣について周布政之助や高杉晋作等は、戦闘能力の関係からみて賛成でなかった様である。当時、藩士に取り立てられたばかりの村田藏六の進言によるものとか言われている。



益田親施肖像

七月一八日の夜から一九日にかけて、禁門（蛤御門）の変がおきた。



国司信濃肖像

これは、三家老を中心に二千名余の長州勢と、五万乃至六万余の会津・桑名・薩摩の連合軍、即ち、幕府軍との会戦である。時に、幕府側の

参謀は、西郷隆盛であったという。

この戦いは、天竜寺に陣していた国司信濃率いる長州兵と会津兵との激突からはじまり、その上に桑名・薩摩の加勢があったので大敗の悲運に遭った。

この時、西郷は足に負傷したというが、長州の木島又兵衛は惜しくも戦死している。

山崎に陣した益田親施、伏見に陣した福原越後の諸勢も、幕府の大攻勢によって惨敗している。

京都の戦では木島の他、松陰門下の久坂玄瑞・入江九一・寺島忠三郎等の著名人をはじめ約三百人の長州側の戦死者があつたが、その半数は他藩よりの協力者であつたという。また、この戦で三条の長州屋敷に火がかけられ、折りからの北風に煽られ大火災となり罹災戸数二七五―三戸、橋梁破壊四ヶ所、神社焼失二五三があつた。その上天竜寺に貯蔵してあつた長州米六百俵が、薩摩に奪取されたという。時を同じくして、江戸の長州屋敷も取り壊され風呂屋の薪になつたとの話もある。

禁門の変の戦で、長州側の弾丸が門内に入り、その上大敗したので朝敵の汚名を被り、長州征伐のきつかけをつくらせることとなつた。

早速、幕府側では七月二三日、征長の勅許を乞ひ、八月一五日には西南諸藩に出撃準備令を出している。しかし、諸藩の中にも足並みは揃わなかつたよう

ある。一月一八日に総攻撃を予定していた。

機を同じうして、困つたことに八月五、六日に下関戦争が起きた。これは、英米蘭仏四ヶ国の軍艦一七隻、兵員五千人をもつて、姫島を基地として下関に近付き艦砲射撃をなし、更に、陸戦隊を上陸させ、前田壇の浦の砲台を占領した。これに対して、長州藩兵二千人が応戦したが、如何ともする事が出来ず退却している。これで、長州は幕府と外国との両面、即ち腹背に敵を受けることとなつたのである。

このような危機に立つた長州藩内の動向をたどつて見ると七月二七日宮市大専坊において最高会議が開かれている。その概要は、京都の変動は藩主の意志にあらず、むしろ三家老・四参謀の暴発によるものとして、取りあえず七士に謹慎を命ずる。これによって三家老は、徳山藩にお預けとなつた。

九月二五日君前会議が開催され、保守派（俗論党・謝罪恭順）と正義派（武備恭順）二派に分かれて八時間におよぶ激論となる。

保守派は、大義名分が立たなくても、藩主を保全することを主張した。これは、吉川監物（経幹・岩国藩主）をはじめ寄組や大組等上層部の意見である。これに対し、井上聞多は武備恭順を主張した。最終的に藩主毛利敬親は、武備恭順の裁決を下した。このことにより、正義派の井上聞多は湯田の袖解橋のたもとで、保守派に斬られ重傷を負ったが、母の愛情により一命を取り止め明治になって活躍している。

正義派の重鎮周布政之助は自決した。これにより、保守派の時代となった。保守派の巨頭は椋梨藤太である。

この頃、徳山藩でも保守派と正義派の闘争があった。一月四日、幕府側の西郷隆盛と長州側の吉川監物とが岩国で会談し、三家老の自刃と四参謀の斬首の合意がなされた。

一月十一日、益田・国司の両家老は、徳山で自刃した。福原は、徳山藩主の兄に当るので、徳山で自刃さすに忍びないとの理由により、岩国に護送され、一

一月二日川西の童護寺（清泰院）で自刃させた。三家老の三ヶ月余の徳山での配所生活は知り得ないが、いろいろな感慨が去来して、暗雲の日々が多かったであろう。

一月二三日、三家老の首級は首桶に納め長持に入れて、陸路広島国泰寺に運ばれた。責任者は、寄組の志道安房であった。そして、翌一四日に尾州藩家老成瀬隼人が首実検をし、次いで、一六日に征長総督徳川慶勝が広島に到着し、一八日に首実検がなされ、翌九日には、総督より吉川監物が首級を受領した。

二月五日には、藩主毛利敬親より伏罪状が幕府に提出されて、三家老を犠牲にして、戦火を交えずして第一次長州征伐は終わることになった。

三家老の終焉の地というべき徳山で、今の時代、その功績追慕の念はあまりないようである。

三家老の辞世の句

。福原越後（宇部領主）

苦しきは絶ゆる我が身の夕煙

空に立つ名は捨てがてにする

。益田親施（須佐領主）

今更に何怪しまん空蟬の

善きも悪しきと名のかはる世に

。国司信濃（万倉領主）

飛鳥川きのうにかはる世の中の

うき瀬に立つは我身なりけり

追 録

(1) 三家老の徳山における幽閉所及び自刃所

。福原越後

幽閉 西の丁（現岐山通二丁目・第一生命内）

山本伊三郎宅（衣笠伊織宅）

自刃 岩国川西 竜護寺

石碑は、岐山通二丁目歩道脇にある。

。益田親施

幽閉

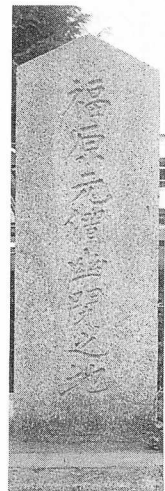
三番丁北詰（現三番町三丁目三五）

惣持院（廃寺・現民家） 自刃も同所

石碑は、毛利町三丁目交差点脇にある。

。国司信濃

幽閉・自刃 下御弓丁 澄泉寺（廃寺・現民家）



(2) 四参謀 穴戸左馬介・佐久馬佐兵衛・中村九郎・

竹内正兵衛、菽 野山獄で斬首

参考文献

(3) 七卿 三条実美・三条西季知・壬生基修・四条隆

諱・錦小路頼徳の五卿は、徳山浜崎に上陸

幕末維新の民衆世界
徳山藩時代の標石

し三田尻へ

徳山市史

一東久世通禧・沢宣嘉の二卿は、翌日三田尻

画報近代百年史

へ上陸

国司親相伝

(4) 中山忠光卿

豊浦郡田耕村で保守派により謀殺される。卿は

明治天皇の叔父に当り、長州の大事件であった。

花神

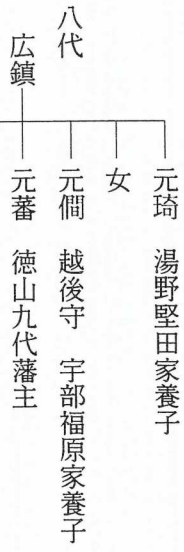
激動の長州

最新日本史

山口県の歴史

防長史講話

(5) 福原越後と徳山毛利家との関係



元徳 宗藩毛利家養子

志朝 館林藩秋本家養子